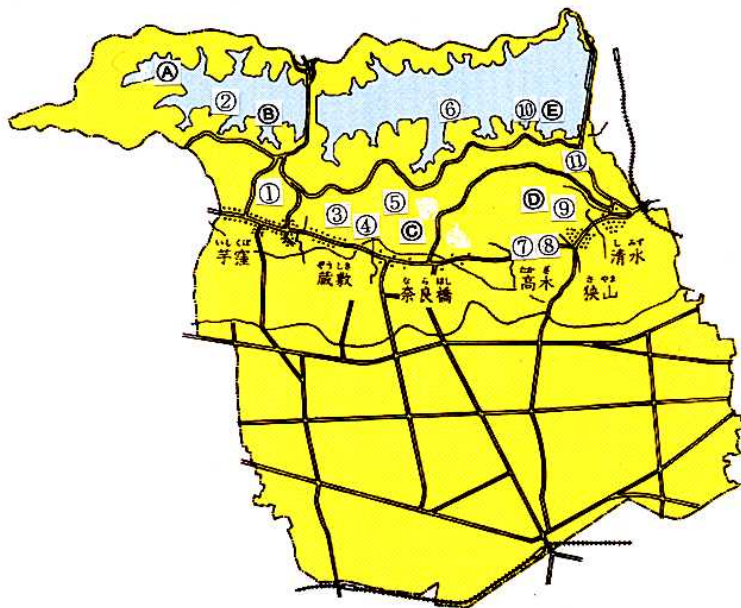


東大和市の神社と寺院

(2000. 10. 28)

I 東大和市の神社と寺院位置図

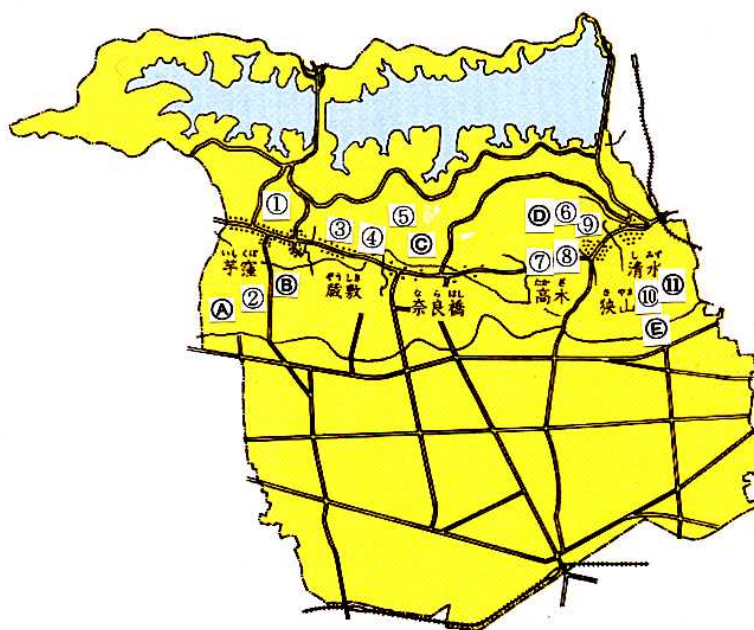
(1) 明治・大正初期



備考 ①は神社 ㊦は寺院

- ①豊鹿島神社
- ②住吉神社
- ③蔵島神社
- ④熊野神社
- ⑤八幡神社
- ⑥御霊神社
- ⑦高木神社
- ⑧塩竈神社
- ⑨神明宮 天狗社
- ⑩氷川神社
- ⑪熊野神社
- ㊦慶性院
- ㊦蓮華寺
- ㊦雲性寺
- ㊦円乗院
- ㊦三光院

(2) 現在（貯水池建設に伴う移転後）



- ①豊鹿島神社
- ②住吉神社
- ③蔵島神社
- ④熊野神社
- ⑤八幡神社
- ㊦狭山神社
- ⑥御霊神社
- ⑨神明宮 天狗社
- ⑦高木神社
- ⑧塩竈神社
- ㊦清水神社
- ⑩氷川神社
- ⑪熊野神社
- ㊦慶性院
- ㊦蓮華寺
- ㊦雲性寺
- ㊦円乗院
- ㊦三光院

Ⅱ 神社

東大和市には、前ページ図の左からたどると、現在、次の神社と多くの屋敷神が祀られている。

豊鹿島神社（芋窪）、住吉神社（芋窪）、熊野神社（蔵敷）、巖島神社（蔵敷）、八幡神社（奈良橋）、高木神社（高木）、塩竈神社（高木）、狭山神社（狭山）、清水神社（清水）。その他、各神社に合祀されている神々、御岳神社（蔵敷）、日枝神社（蔵敷）などである。

（１）豊鹿島神社

所在 芋窪１丁目２０６７番地



豊鹿島神社



大ケヤキ（旧東京都 天然記念物）

豊鹿島神社は東大和市内では、最も古い創建の伝承（慶雲４年＝７０７）を持つ。本殿は、現在のところ東京都内室町時代神社建築物の最古とされ、東京都の有形文化財の指定を受けている。

芋窪を特徴づける３つの谷（西谷ツ、中谷ツ、東谷ツ）の中央、通称、中谷ツの台地上にあり、東大和市の神社と集落の構成の特徴をよく表す。

発見された中世の棟札には、「鹿島大明神」、「鹿島大神宮」の記載がある。江戸時代には「鹿島神社」と呼ばれ、明治以後、「豊鹿島神社」になった。徳川家光による１３石の御朱印状があったと伝えられるが、現存しない。かつて、この神社の古さのたたずまいをそのまま感じさせる大ケヤキがあったが、今は、枯れて、その一部を残すのみとなった。（画像右）

「武蔵名勝図会」は、創建に関する社伝を

『慶雲四年（七〇七）、武蔵の国へ来た鬼神を常陸峯に鎮めて・・・、天智天皇第四の姫宮及び蘇我山田石川麿が建立した。祭礼に獅子舞を舞うが、獅子頭は三面である。それは、この時の鬼神の面が三面であった古例に因んでいる。』としている。

「新編武蔵風土記稿」「武蔵名勝図会」は、建武３年（１３３６）の銘をもつ大鐘が奉



拝殿の奥に本殿が祀られている

納され、盗難にあっていることを伝える。

「新編武蔵風土記稿」「狭山之栞」には、文正元年(1466)本殿の再興を伝える棟札の記載がある。その行方がわからなかったが、平成4年に実施された本殿の改修工事の際に、発見された。これにより、創建は文正元年にまで遡ることが確認された。

祭神は武御加豆智命^{たけみかづちのみこと}で、常陸国一宮、鹿島神宮(茨城県)に祀られる武みか槌神(たけみかづちのかみ=武御賀豆智神・武御雷神)であり、『古事記』に語られる武神である。

境内の末社には、白山神社(伊弉那岐命=いざなぎのみこと)、日吉神社(大山昨命=おおやまのみのこと)、稲荷神社(豊受姫命=とようくひめのみこと)、愛宕神社(火産霊命=ほむすびのみこと)、産泰社(木花咲耶姫=このはなさくやひめ)、滝沢明神社(祭神不詳)、九頭龍神石碑(九頭龍大神=くずりゅうじん)がある。

文正元年(1466)の棟札 豊鹿島神社本殿修理工事報告書p98

境外末社として、別に記す住吉神社(底筒男命他)がある。また、境内背後の丘を登ったところに、豊鹿島神社の「奥宮」の跡と云われるところがあり、旧別当寺院が北側の谷にあったという伝承もあるが、詳細は不明。

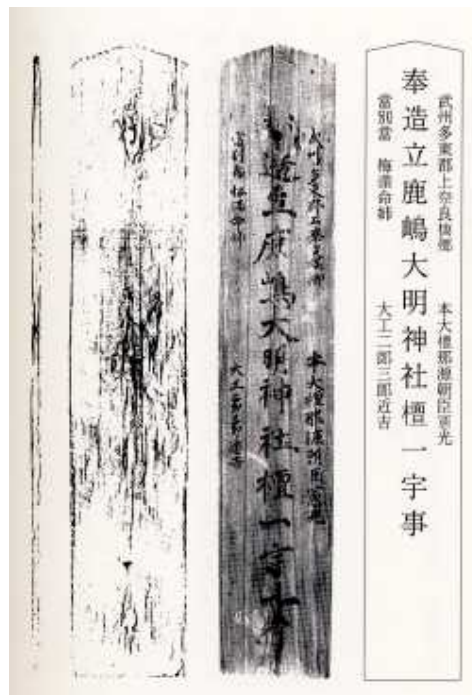
・本殿

東京都指定文化財説明パンフレットには次のように書かれている。

『本殿は一間社流造で、都内に現存する最古、かつ唯一の室町時代に建立された神社本殿です。

その規模は、桁行(間口)が170.7cm、身舎(もや)の梁間(奥行)が152.4cm、向拝の梁間はやや狭くて140.4cmです。

この本殿の建築年代は、社家に伝わり、本殿内に保管されていた天文19年(1550)の棟札をもって建立されたと考えられてきました。しかし、解体修理時に発見された棟札により、文正元年(1466)に大工二郎三郎近吉の手により建立されたことが明らかとなりました。同時に、古くは屋根が厚板葺きであったことも判明しました。』



豊鹿島神社本殿

東京都指定文化財説明パンフレットより

例祭は9月15日、1月1日元旦祭、2月3日節分祭、2月19日祈年祭、4月15日春祭り、6月30日大祓い、11月15日七五三、11月26日新穀祭、12月31日は大祓。

昇隆学校

豊鹿島神社にはもう一つの歴史がある。明治の学校^{しょうりゅうがっこう}「昇隆学校」である。明治5年学制発布と共に芋窪には豊鹿島神社石井以豆美方に小学校「小偵学舎」^{しょうていがくしゃ}が設置された。

明治10年小^{しょうていがくしゃ}偵^{てい}学^{がく}舎^{しゃ}は蔵敷の太子堂に置かれていた「汎^{はん}衆^{しゅう}学^{がく}舎^{しゃ}」と合併して「昇^{しょう}隆^{りゅう}学^{がく}校^{がう}」となった。この「昇^{しょう}隆^{りゅう}学^{がく}校^{がう}」の訓導、生徒たちが明治11年、蓮華寺で自由民権運動の学習結社「衆^{しゅう}楽^{らく}会^{かい}」を作ったのである。高揚する三多摩自由民権運動の中で、最も早い学習結社と注目されている。



青梅街道に面する鹿島神社参道に「昇隆学校」はあった。左画像火の見櫓後ろに新しい建物が復元されている。右画像がその全容。

明治14年に、「芋窪村学術演説会」が警察署長の視察の中で開かれたのも「昇隆学校」であった。

(2) 住吉神社

所在 芋窪4丁目

「原」と呼ばれる一面の畑の広がる地域に「天王様・住吉様」は遷られた。今は住宅地の間にこじんまり祀られている。

貯水池に沈んだ石川の人たちの神社で、貯水池移転により、豊鹿島神社の境外末社として蓮華寺の近くに祀られている。

東大和市史資料は次のように伝える。

『中石川にあったこの社は、移転の時、鎮守の豊鹿島神社に合祀する話があったが、石川の氏子たちの希望で人びとと共に現在地の芋窪4丁目へ移り、天王様として祀られた。』



住吉神社正面

祭神はいわゆる住吉三神(底筒男命、中筒男命、表筒男命)と素戔雄命(牛頭天王)である。十余年前、住吉神社の話聞いた時、「本当は八雲、住吉神社という」と何度も力をこめて語った氏子の古老がいたが、今もこの神社が一般に「天王様」といわれているゆえんである。』

(東大和市史資料編 2 多摩湖の原風景 P99)

いかにも地域の人に守られているお宮で画像の左側小さなお宮は「籐兵衛さんと狼」の物語に関わる社である。



住吉神社と社

(3) 巖島神社

所在 蔵敷1丁目367

巖島神社参道



巖島神社



芋窪から蔵敷の高札場に至る間の小径を狭山丘陵に向かって入ると、みちも突き当たりのような曲がり角の奥に「巖島神社」の鳥居が目に入ってくる。ほとんど部外者には気付かれないようなところで、下草が刈られ、落ち葉が掃かれて、地元の人がお祀りをしている。

「新編武蔵風土記稿」によれば

『弁天社 字弁天山にあり、一尺五寸の小祠にて、二間四方の上屋を設く。寛永六年鎮座せしといえど、其詳なることを伝えず』

「狭山の葉」の記述によれば

『弁財天女の祠は内野氏宅の乾にあり。昔、同氏の創建なりしが天保14年再建す。維新の際巖島大明神と改称す。麓に同氏一族の墓あり。』
としている。

「東大和市史」は次のように紹介する。

『祭神は市杵島姫命（いちきひめのみこと） 大祭は9月15日。』

創建は永禄12年（1569）年といわれ、内野家の伝承によると、かつて私有地に祠を建て奉斎し、天正の検地の際に貢租を免ぜられたと伝えられる。宝暦8年（1758）に祠を新たに作り替え、内野家の守護神として崇拝し、天保6年（1835）に現存の本殿が建立された。



一方、小嶋家の古文書には、創建は天正16年（1588）、社殿造営は宝永5年（1708）
神社からは墓地と家々が見守るように見える
と記されている。当初弁財天と称されていたが、明治時代になってから巖島神社の神号を改め、村社として内野家から移された。』

市杵島姫命は水の神として崇められていることから、農耕の守護神として勧請されたのか？

(4) 熊野神社

所在 蔵敷1丁目

蔵敷の高札場の横を狭山丘陵に入り、急な階段を上ると熊野神社はある。



「狭山の葉」の記述によれば

(左) 熊野神社参道と(右) 熊野神社

『村長内野氏の鬼門除に建立せしと。現在は村里の鎮守とす。同氏分家15軒ありてここより東西へ7軒宛住居す。・・・』とある。

「東大和市史」では

『・・・また内野家の伝えによると、蔵敷の巖島神社が永禄年間(1558～1572)前後の創立といわれるところから、同じころに創建されたものと推測される。また、小島蔵之助氏方の古文書には、創建は天文2年(1533)とあり、社殿の造営は寛永6年(1629)11月と記されている。

なお、当社はは修験が信仰の対象として勧請したとも伝わる。』
としている。

東大和市史資料集8 信仰のすがたと造形では

『祭神に、いざなぎ尊・いざなみの両尊を祀る。かつては熊野大権現と称されたが、明治元年(1868)熊野大神と改称され、同6年(1873)村社となった。

例祭は9月19日に行われる。境内に末社として、稲荷神社を含む三社を祀る。』

とする。



村社熊野宮鳥居石階石橋之石碑

鳥居と石段の間に「村社熊野宮鳥居石階石橋之石碑」があり

正面に

「武蔵国多摩郡蔵敷村鎮座

村社熊野宮鳥居石階石橋

維持明治十五年・・・氏子中」

の記載がある。



境内に「力石」が置かれているのが楽しい。これら
をかつぎ合って力自慢をした蔵敷村の青年たちの姿が目につく。

熊野神社力石

『力石を持ち上げるには、中腰になり、一度膝の上まで石を持ち上げ、かけ声とともに力を振り絞って一気に肩にかつぎ上げたものです。大 1 2 1 キロ、中 9 6 キロ、小 7 5 キロ』との説明版がある。

(5) 八幡神社

所在 奈良橋 1 丁目

八幡神社は狭山緑地の入り口、東大和市郷土博物館に接する台地にある。

「狭山之栞」には、『村里の惣鎮守なれど勧請年紀を不詳。祭神は誉田和気尊、応神天皇也。祭典毎歳八月十五日。別当本山修験八幡山覚實院は聖護院旧宮末小田原玉龍坊配下府中門善坊霞下也。・・・』と記されている。

後にふれる修験との関係の深い神社である。東大和市史資料集 8 信仰のすがたと造形では

『社伝によれば、その昔、戦いによって宮が壊れようとした時に、武士がこの森に逃げて来て露營しようと辺りを見渡すと、暗い中に宮があったので、その中で眠ることにした。そうすると、夢の中に「吾は八幡の神なり。」と八幡神が現れて、当社によく宿ってくれたと述べてから、宮が破損しようとしているので村人に建て替えることを知らせてほしいと言った。そこで武士は夢からさめて地領に行き、その旨を伝えたという。

社殿は天正 3 年(1575)11月、領主石川太郎右衛門の寄付により社殿が再興され、その後元禄 2 年(1689)9月、旧領主石川太郎右衛門ならびに岸隼人によって拝殿が建てられ、その後、昭和 7 年(1932)本殿、幣殿、拝殿が改築された。

主祭神として誉田和気尊(ほんだわけのみこと)を祀り、その他の祭神に応神天皇(おうじんてんのう)・大山祇命(おおやまつみのみこと)・日月大神(にちげつのおおかみ)・市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)・火産日神(ほむすびのみこと)・建御名方命(たけみなかたのみこと)を祀る。

末社には富士浅間社・神明社・武内社・御嶽社・大六天社を祀る。

大祭は九月十五日に行われるが、毎月一日、十五日は月次祭と称し、お宮の扉を開け、燈明を灯す。一月一日は元旦祭、二月三日は節分祭、二月十一日は建国祭、四月十五日は祈念祭、六月三十日は大祓い、七月十五日は夏祭り、十一月十五日は七五三、十一月二十三日勤労感謝祭、十二月三十一日は大祓いが行われる。



八幡神社



八幡神社大櫓の根



八幡神社末社

当社には天正三年（一五七五）および宝暦四年（一七五四）の棟札が伝わることから、古社であることがわかる。さらに境内には、かつて参道の人りに口にあった樹齢約二七〇年の大杉の根株があるが、この杉は、かつて祈願成就のために地域の住民によって植樹されたことから窺えるように、市内でも古社であることがわかる。・・・』

としている。

（７）高木神社

所在 高木２丁目

高木の獅子舞として親しまれている高木神社であるが、この名前は神仏習合を排除した明治維新のときに生まれた。

東大和市史資料集８ 信仰のすがたと造形では、その経過を次のように紹介する。

『当社の創建は不明だが、尉殿（じょうどの）神社という名称で宝暦八年（一七五八）に再建されたと伝わる。また、高木山明楽寺が別当であったが、廃仏毀釈のため廃寺となり、明治十三年（一八八〇）高木神社と改め今日に至っている。

祭神は『狭山之槩』は不詳としながらも手力雄命（たちからおのみこと）と記載する一方で、平成六年（一九九四）に行われた社殿改修の際の記念碑には、高皇産靈神を祭神とすると記している。大祭は九月十五日に行われる。かつて江戸時代、悪疫が流行した時にその退散を祈願して舞われるようになったと伝わる獅子舞が昭和三十一年（一九五六）まで大祭に奉納され中断があったが、平成６年から舞われている。』

境内には末社として、八坂神社、秋葉神社、稲荷神社、山神社が祀られている。山神社はずっと南の住宅地化された道筋にあったもので、開発の進展とともにここに移された。

（８）塩竈神社

所在 高木２丁目

塩竈神社



高木神社



山の神

高木神社には安産の護り神として人気のある「塩竈神社」が社殿に向かって右隣に祀られている。

東大和市史資料集８ 信仰のすがたと造形は

『当社の総本社は宮城県の塩釜市にあり、祭神を塩釜神と称するもので、当社はその分社にあたる。記録によると「明治十丁丑年四月十日、尉殿神社の隣に塩釜神社を勧請す」と記載されているように、江戸末期から明治時代の初期にかけて、高木村の尾崎金左衛門という人物の土地に屋敷神として祀っていたものの、明治になると金左衛門は「一軒の家には、長い間に栄

枯盛衰があり、後の世までお祀りできるかどうかわからぬ。」と考えて、屋敷神を高木神社の境内に移した。

塩釜神社では、四月十五日に大祭が、毎月十五日には小祭が行われていて、大祭当日は八幡神社の神職が祈祷を行い、小祭では、世話人が出て清掃し注連縄を張り替えて参詣の方に護符などをお分けしている。』と紹介されている。

この神社の境内にあったのが「明楽寺の会所」で、東大和市の自治の拠点となった。

明治22年、それまで芋窪、蔵敷、奈良橋、高木、狭山、清水に分かれて、それぞれ独立の村を構成していた東大和市域の村々は、市制町村制による合併を望まず、組合村を構成した。「高木他五ヵ村組合」である。この役場になったのが「明楽寺の会所」で、以後村役場が建設されるまで、ここで議会が開かれ、行政が執行された。



改築された会所（高木神社の社務所）

狭山神社

（9）狭山神社

所在 狭山2丁目1326

右の画像には正面と左右に鳥居が3つ見え、下の行事案内では神明社、愛宕社、本社の祭りがある。現在は狭山神社と呼ぶが、多くの神社が一緒になっている。



「新編武蔵風土記稿」には狭山村の前身である「後ヶ谷村」の項に、「稻荷社」、「山神社」、「神明社」、「天狗社」、「御領明神社」、その末社「愛宕社」の6社があったことが記載されている。

「御領明神社」は位置図⑥の御霊神社で、湖底に沈んだ「内堀」字前島にあった。

「狭山の栞」では「神明神社」、「前野稻荷」、「愛宕神社」、「天宮神社」、「山神の社」が紹介されている。5社である。



「新編武蔵風土記稿」「狭山の栞」ともに「狭山神社」はない。「狭山の栞」がまとめられたのが明治9年であるから、狭山神社ができたのはそれ以後となる。明治39年4月に、「神明社」「愛宕社」「稲荷社」「山神社」が移転することが許可されて、9月に移転している。このとき、改称されたのだろうか？

画像の左側は「山神社」、右が「稲荷社」で、かつては後ろ側左側に「愛宕社」、右側に「神明社」が祀られ、4社に囲まれるように本社があった。現在は後ろの2神は本社に合祀されている。

「御領明神社」＝「御霊神社」は大正12年、貯水池の建設に伴い「狭山神社」に合祀された。こ

うして6つの神社が「狭山神社」を構成している。しかし、先の2資料から位置、祭神を追うと、神明神社と天宮神社の故地が交差するところがあり、正確な当時の再現が待たれる。最近、「神明社」の跡にその位置を示す碑が建てられた。

大祭は9月14・15日、末社である神明社祭は4月14・15日、愛宕社祭は7月23・24日に行われる。その他、当社の行事として、1月1日、元旦祭、2月3日、節分祭、11月15日、七五三祈願祭、同23日、勤労感謝祭、そして12月下旬、「かまじめ祭」が行われる。



最近示された神明社跡の位置

(10) 清水神社

所在 清水3丁目

最初から「清水神社」としてあったものではなく、大正8年頃、貯水池建設に伴い移転の対象となった⑩「氷川神社」と⑪「熊野神社」を合祀して、社名を「清水神社」と改称して、現在地に移って祀られた。

氷川神社は徳川幕府から五石の御朱印を受けていた。創建は建保2年(1214)といわれ、多摩湖の湖底に没した宅部川の谷戸に鎮座していた。



祭神は素盞鳴尊・大己貴尊（おおなむちのみこと）・稲田姫命である。「狭山の葉」には、『本地仏坐像の聖観音一尺五寸』とある。

「新編武蔵風土記稿」には神体と称する絵馬があったことを伝え、そこには「武州多東郡宅部郷惣社氷川大明神御神体」と記載されている。

同様に、「狭山之葉」には『勧請年紀不詳。古時は宅部、清水、内堀、日向、境、廻り田、後ヶ谷戸七村の総鎮守』と記載されている。

日向、境、廻り田は現在東村山市域に属している。

中世の「宅部」郷の存在、その範囲が東大和市から東村山市に及んでいたことを示唆する。

大祭は9月15日、1月1日に元旦祭。



敷石之碑

鳥居の向かって右側に3つの石碑がある。その一つが上の画像の「敷石之碑」で、氷川神社の参道

に敷石を敷いたときの記念で、明治41年に建てられている。背面に伊勢太々講中によることが刻まれ、当時の講を構成していた人たちの名前がわかる。明治34年発として抽選順で名前が刻まれているのも面白い。

境内には末社として、右画像のように、稲荷社と愛宕社が祀られている。愛宕社は、個人の屋敷にあったものを祀ったといわれる。



清水神社稲荷社 愛宕社

(11) その他の神社

東大和市には、以上に紹介したほかいくつかの神社と多くの屋敷神が祀られている。



新編武蔵風土記稿に記載の蔵敷村御獄神社



蔵敷の農兵訓練所跡にある日枝神社

Ⅲ 寺院

東大和市には、1ページの位置図の左からたどると、現在5つの寺院がある。

慶性院（芋窪）、蓮華寺（芋窪）、雲性寺（奈良橋）、円乗院（狭山）、三光院（清水）

① 慶性院

所在 芋窪6丁目1353番地

貯水池建設に際し、湖底に沈んだ芋窪村石川から、狭山丘陵の南側の原に移転した。

新義真言宗、豊山派、本尊・不動明王。白部山医王寺と号する。中藤村（武蔵村山市）・真福寺の末。

石川の谷では最も西に位置していた。

「新編武蔵風土記稿」では、『医王寺除地五畝十八歩、字石川にあり、白部山慶性院と號す、開山承秀慶長六年十一月二十八日寂せり、本堂五間に八間南向、本尊薬師木の立像長一尺六寸、行基の作を置き、鐘楼に鐘を掛けたれども、正徳中の新鑄なり、こと

慶性院本堂



に考証とすべきことなければ、銘文はとらず』とある。

「狭山之栞」には『・・・本尊不動明王の座像は長一尺五寸ばかり・・・開山尊承法印は天文十六丁未年正月寂す。地内白山神社ある故白部山と号し、薬師堂あるにつき医王寺と呼ぶ。寺僧圓鏡法師曰く・・・また、慶性の二字は慶長と同意なれば是によって考ふれば、慶長の頃此処へ引寺となりしなるべし・・・。前記圓鏡法院は姓を田口と云い下宅部の産にして三光院比丘順孝の徒也。同師後の山中に水天の像を勧請す。』と記されている。

東大和市史資料集 8 信仰のすがたと造形は

『・・・当寺の創建を天文16年(1547)以前であることをうかがわせている。当寺はもとは薬師如来を本尊としていたが、明和2年(1765)、時の住僧鏡意が真言宗の正統の法脈を伝承したことにより、本尊としたという。



現本尊不動明王坐像は寄せ木造りで体内はおおきな内割りがあり、像底部から別の小さな不動明王立像を納入している。貯水池の建設にともない、大正11年に現在地に移転された。移転間の様子を描いたスケッチをみると表門(現・慶性門)を入ると正面に本堂があり、その東に隣接して庫裏がある。本堂の前庭は広く、その西寄りに南北に長い池が描かれている。また境内の西側のすこし小高くなったところに鐘楼と薬師堂が見られる。

正徳年中の鐘は昭和19年供出され現存しないが、『狭山之栞』にその銘文が掲出されている。それによれば、

「奉納薬師御宝前

武州多磨郡芋窪村

白部山慶性院

我此銘號 一經其耳

衆痛悉除 心身安樂

日光佛

月光佛

慶性院現住

法印賢秀

時正徳元年辛卯十月吉日

江戸神田住鑄工多川長門守見年作」

とある。』



慶性院水天像

水難除け、雨乞いの祈願をした

としている。

⑨蓮華寺

所在 芋窪3丁目1615番地

大正12年、貯水池建設に伴い、狭山丘陵の南側に移転した。

「新編武蔵風土記稿」の記載は至って簡単で

『愛染院 除地 六畝、字前坂にあり、石澤山蓮華寺と號す、真言宗新義、中藤村真福寺の末、開山開基の年歴を伝へず、本堂八間半に七間東向、本尊不動木の立像長一尺三寸なるを安せり』とある。

「狭山の栞」は次のように記載する。

『・・・開基草創未詳。中興開祖承雲法印は寛永八年(1631)四月十二日入寂す。・・・寛永六年(1629)十一月検地の節、字石川の名のもとに畑四畝二十四歩寺屋敷共蓮華坊へ下付せられ一切凡そ二町歩あり。檀家百二十五戸。』とやや具体的に記載されている。

蓮華寺本堂

東大和市史資料集8 信仰のすがたと造形は

『・・・その後寛保3年(1743)11月2日。法印賢真の代にいたり、中藤村真福寺法印有範より印可を受けたと伝えられる。このことをもって法流開基とする。

天保10年(1839)に火災があり、同14年に再建されている。それまでも火災にみまわれ、あるいは無住の時期(天保8～9年の頃)もあるなど荒廃をくりかえしてきた。・・・

旧地の前坂は地元では「めえさか」と呼びならわしていたが、付近には繭(まゆ)の形に崩れる土のあったことから「まゆ坂」の意味であるとの説もある。

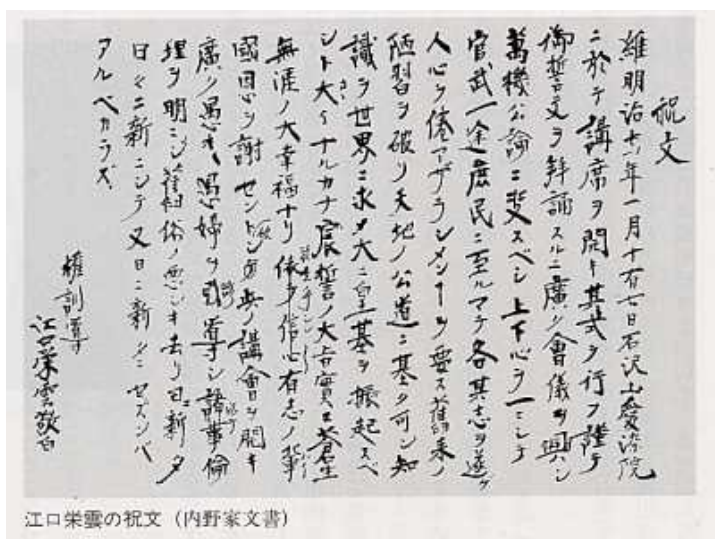


東大和市史資料編2 多摩湖の原風景 p100

大正12年、貯水地の建設にともない現在地に移転した。移転とともに旧地から移した石造物も多い。昭和19年(1944)、第二次世界大戦の最中都内赤坂小学校の児童の集団疎開を受入れ、翌年には戦災孤児となった13名の子供たちの世話をしている。寺は宗教的活動ばかりでなく、こうしたいわば福祉活動やあるいは寺子屋といわれるように教育活動をおこなうものも多くあり、地域の発展に大きく貢献していることも忘れてはならない。』

蓮華寺の歴史の中で、大きな意味をもつのが、自由民権運動の学習結社「衆楽会」が、多摩の中で最も早く開かれた場所であったことである。

明治11年1月17日、地元の先覚者や「昇隆学校」(鹿島神社の参道前に設置さ



れていた)の関係者が蓮華寺に集まり「自治の道」「衆楽会」で発表された祝文 東大和市史 p264 を求めて民権学習会を発足させたのである。これは、三多摩で最も早く開かれたとされる野津田村(町

田市)の結社「^{せきぜんかい}責善会」よりも4ヶ月も早かった。引き続き、蓮華寺は「衆楽会」の本部となっている。

◎雲性寺

所在 奈良橋1丁目363番地

すでに紹介した「慶性院」と「蓮華寺」は貯水池建設によって石川からの移転を余儀なくされ、元のたたずまいが失われた。雲性寺は当初からこの地に建立され、その姿を現在に伝えているので、谷戸の集落と神社(八幡神社)、寺院の位置関係が市内ではもっともよく残されている。

周辺は水田で、その中をあぜ道のように参道があり、山門へと導いていた。広くとられた前庭、丘陵の麓に構える山門がその雰囲気を残している。

新義真言宗、豊山派。本尊阿弥陀三尊。天王山観音院雲性寺と号する。中藤村・真福寺の末。

境内には、本堂と観音堂がある。狭山三十三観音霊場第十八番札所として十一面観音像をまつる。

画像右の本堂は昭和56年、弘法大師1150年遠忌にあたり再建された。当寺の草創、詳細な歴史については不明である。



雲性寺全景



雲性寺本堂

「新編武蔵風土記稿」には

『雲性寺 除地二段五畝、村の北山麓にあり、天王山観音院と號す、新義真言宗、中藤村真福寺の末、開山開基の人を博へず、本堂五間に七間南向、本尊彌陀木の坐像一尺六寸を安せり、境内には此所の地頭石川大郎右衛門代々の墳墓あり、観音堂 門を入れて右にあり、二間四方、観音は十一面木の坐像一尺二寸許なり』とある。

「狭山之葉」には、

『天王山雲性寺観音院は以前は本尊不動明王なりしが後三尊阿弥陀如来を安置す。長二尺許り。脇士勢至観音二体は立像にて長一尺余。中藤村真福寺の支院にして後の山に天王宮ある故天王山と號す。又観音堂あるため院を然か名付く。法流開基法印傳榮は享保三戌年五月五日寂す。地内観音堂本尊は十一面觀世音にして狭山第十八場の霊場たり。除地二反五畝歩は維新の際奉還す。門前に弁財天の小祠ありしが維新の際、天王の社と共に諏訪山に引移す。旧地頭石川太郎右衛門代々の墓碑七本各二尺位也。』とある。



雲性寺地頭墓

東大和市史資料集8 信仰のすがたと造形は

『後世の他誌類、寺伝などによれば、永享11年(1439)に堂宇を建設し天下の安穩、仏法興隆

を祈誓したことに始まるという。

その後、栄枯盛衰を重ね、天正元年(1573)に法印承永が再興し、元禄年間(1688～1703)には地頭石川大郎右衛門により新伽藍を整備されたと伝えられる。』



雲性寺庚申塔

と述べられている。

山門の右下に庚申塔が集められているが、現在も新青梅街道の交差点の呼び名で使われている「庚申塚」の旧地にあったものが、ここに移されて祀られている。

右手前は六十六部回国供養塔で、その後ろは坂東秩父百力所巡礼供養塔で道標ともなっていた。

圓乗院山門

⑨円乗院

所在 狭山3丁目1354番地

狭山丘陵の谷戸を形作る台地にある。狭山神社と併せて谷戸の集落の構成がよく残されている。

「東大和市史資料集8 信仰のすがたと造形」が詳しく紹介しているので、引用する。

『新義真言宗、智山派。本尊・不動明王。過去の火災によって古記録類が焼失してしまったため、当寺の創建、由来など明確にしがたいが、平安時代末期の平治元年(1159)2月8日、狭山円乗院開山法印賢誉入寂の記録がある。また当寺には中世・鎌倉時代から室町時代の板碑が伝わっており、古い歴史をもつ寺であることをおもしろくさせる。

本尊は錐鎖不動と呼ばれ、和歌山県・根来寺の不動明王像を模したものと伝えられ秘仏として祀られている。



道路に面した石階を数段のぼり10数メートル入り、さらに石段を15～6段上ったところに鐘楼を兼ねた山門、いわゆる鐘楼門がある。この門は寛延2年(1749)に建てられたもので、市内では古い建築のひとつである。門には昭和58年、弘法大師1150年御遠忌にあたりあらたに造立された仁王像が山内を守り、上階には梵鐘が吊懸けられている。・・・

『狭山之葉』に記述された円乗院についての記述は少し長文であるが引用すると、

「愛宕山圓乗院醫王寺東圓坊は豊島郡上石神井村新義真言宗中本寺龜項山三寶寺の末派にて開基草創不詳。開山法印賢誉を以って開祖とす。平治元年己卯年二月八日入寂す。本尊薬師如来の本



体五寸余、厨子高二尺余。座像にて寶月智嚴音自在如来にて恵心僧都の作。外に日光佛月光佛十二將神を安置す。寺を醫王と呼び、坊を東圓と號するは皆薬師に因縁あるに依るにや。古時延壽院と云へる寺宇上の屋敷に在りしが、慶長十二末年八月十八日風禍により坊舎悉く吹き潰されしを、愛宕山へ移し山をあたと呼ぶに至る。

開山賢譽より現在木村淳賢まで四十世僧を経たり。廿世慶範法印の時その帰依に因って、南紀根来山錐鎖不動を模し本尊とす。空殿五尺余尊軀長二尺五寸雨童子各一尺五寸也。同法印の代寺地壹反五畝歩の除地を賜りしが現今寺敷地貳反八畝廿三步官有地たる。廿四世宥賢の代享保十一丙午年五月廿四日法流開基香依一色着用の寺格となる。



圓乘院本堂

三二世法印宥祥の代即ち寛政五癸丑年二月本堂並庫裏再建す。入佛供養は文化六巳年十月十五日より十七日迄法如上人を請じ土砂加持大施餓鬼を修行す。(此法如上人は後渋谷室泉寺にて寂し同寺に墓あり)當寺は新四国四捨貳番の靈場、伊豫國佛木寺のうつし也。現在狭山薬師代三十四番たり。(中略)寺宝に兆殿司の薬師像あれど破れたるは惜し。梵鐘無名、寛延二年の建立、高さ龍頭迄四尺二寸口經二尺三寸」とある。



蓋付六面塔六地藏

るを安置す、恵心の作成るよしをいへど、秘してみることゝゆるさずと云、鐘楼、本堂の正面に建つ、二間に三間、鐘は圓徑二尺二寸、このかね寛延二年十月住持承譽の代に鑄成したれば、銘文に載せず、愛宕祠境内の鎮守にて、本堂の後にあり、小祠、下田七畝二十六歩の除地となせり」

と書かれている。なお、上田孟縉の著『武蔵名勝図会』にもほぼ同様の記載がある。狭山薬師第三十四番、多摩四国八十八か所第三十八番、武蔵野三十三観音第八番の札所でもある。』

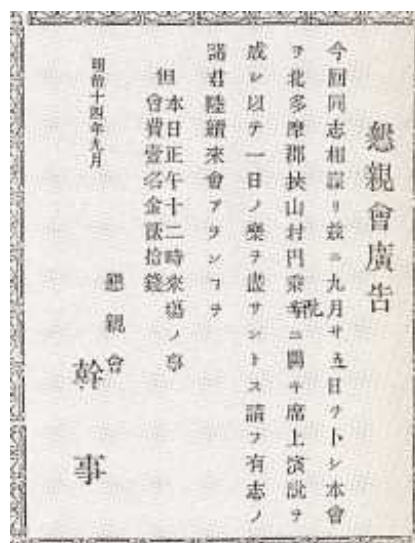
自由民権懇親会

明治14年9月25日、自由民権懇親会が円乘院で開かれた。

自由民権運動の取り締まりが厳しくなった中での懇親会に名を替えた実質上の「演説会」であった。

当日は雨の中、ぬかるみの道を71名(新聞では200名)の参加があり、弁士赤羽万次郎は宮鍋庄之助宅に泊まり、そこへ地元の活動家が集まり、さらに懇親を続けたという。

芋窪の蓮華寺・豊鹿島神社昇隆学校と併せて、東では狭山で民権活動が行われていたことがわかる。



東大和市史資料編10近代を生きた人びと p 63

㊤三光院

所在 清水清水4丁目1132番地

三光院は新青梅街道に本堂と墓地を2分して位置する。貯水池建設に伴って移転を余儀なくされたことによる。

大正12年6月、現在地に移った。

「宅部山」という山号を持つが、旧地の地名である。

喧噪の新青梅街道から境内にはいると、一変して静寂の世界となる。境内は広く、本堂を正面にして左側に観音堂がある。門を入るとすぐ左側に「本四国八十八カ所 お砂踏み霊場」がある。



新青梅街道からの三光院

三光院については住民の多くが様々な思いを持っている。

その一端を「東大和市史資料編 2 多摩湖の原風景」は次のように紹介する。



『青梅の金剛寺客未で、末寺が七か寺もあったといわれ、宅部川の北にあった西楽庵地藏堂も末寺西楽寺の跡という。』

旧幕時代、三石の御朱印を受けており現存する十二通の朱印状は、市の重宝に指定されている。

旧地は下貯水池の取水塔の辺りで、附近の眺めは溪間随一の景勝であった。南の山には金比羅堂や鐘楼などの堂宇があった。山門の近くには、狭山三十三観音札所十六番札所の観音堂があり、参拝を済ませた白装束の巡礼の人びとが、木の間がくれに金比羅堂へ上って行くのが見えたという。そこから山路を木村の橋場にある十五番札所を目指すのである。

当寺は現在、新青梅街道に沿った清水四丁目にある。』（東大和市史資料編 2 多摩湖の原風景 P101）

「新編武蔵風土記稿」は

『開山は圓長と云、天永三壬辰五月三日寂す』としているが、「東大和市史資料集8 信仰のすがたと造形」は

『…、平安時代末の天永3年(1112)に滅した圓長の開山とするが、寺伝によれば、開山となった快光法印は延文2年(1357)6月1日に入寂し、また開基の石井美作が延文4年(1359)に薨去されたことなどから、延文の頃にはすでに創建されていたものと推定される。』



三光院の板碑

下って天正19年(1587)11月には徳川家康公より御朱印三石を賜り、以来徳川家より御朱印の沙汰があった。現在12通の御朱印状を伝え、市の重宝に指定されている。

当初、御室仁和寺派(おむろにんはじ)の直流であったが、寛永10年(1633)に青梅・金剛寺の客末になる。往古は所在の地名から山号を宅部山と号したが、安永10年(1781)に輪王山と改称した。描かれた年代は不明であるが三光院の古図には、寺は東面にたてられ、境内は1万坪あり、本堂のほか庫裏、長屋、土蔵、鐘楼、大日堂などがあり、弁天、天神が祀られていた。本堂は『新編武蔵風土記稿』には「本堂十間に五間東向、本尊阿弥陀を安す」とあり相当の規模であったことを伝えている。

また、別の寺伝によれば、末寺は日向山光明院、宝珠山西楽寺、大泉寺、吾庵山道金寺、松林庵、泉濟寺、金剛庵の6か寺があたつと伝え、さらに支配所として、天神宮(境内)、弁財天宮(同)、大日堂(同)、山王社(宅部村)、稻荷神社(同)、荒神社(同)、阿弥陀堂(内堀村)、氷川大明神(日向村)、大六天(同)、神明社(同)、稻荷社(同)、地藏堂(杉本邑)、金山社(山下)、氷川明神宮(廻り田新田)、山神祠(当初)などを上げている。かつての繁栄の様子をうかがえよう。』とする。

新青梅街道南側の墓地には、大日堂(中堂墓地)や貯水池移転により墓地を移した経過を語る「遷墓之碑」、江戸時代からの数々の「豊篋印塔」がある。



境内に保存されている「板碑」
時宗系のものである



「遷墓之碑」の現状

IV 廃寺

現在一般的に接することのできる寺院は以上の5カ寺であるが、「新編武蔵風土記稿」や「狭山の葉」には、これら以外に多くの寺院があったことが記されている。これらは多くが「修験」に関係し、当時の東大和の信仰に大きな影響を与えている。読み続ける都合上、清水からあげてみる。

・清水村成就院

「清水山成就院 新義真言宗中本寺、上石神井村亀頂山三寶寺の門徒也。本尊阿弥陀如来。開基は地頭浅井九郎左衛門利政にして代々の菩提所と称す。開山阿闍梨法印は延宝四丙辰五月十一日入寂し、中興榮智法印は享保十七年子十一月十一日寂す。上田壺反式畝歩及び境内壺町歩を賜る」(『狭山の葉』)

「成就院除地二段許、村の中央にあり、新義真言宗、豊嶋郡石神井村三寶寺の末、清水山安養寺と號す、開山開基詳ならず、本堂七間に五間南向、彌陀長一尺なる木の坐像を安す、境内熊野社に接し、松杉雜樹繁茂なせり」(『新編武蔵風土記稿』)

清水村をおさめた地頭浅井家の菩提寺であった。東京都青年の家のあった近くに1町の広さの寺院

があったことになる。

・持寶院

「本山修験大聖山持寶院は、森御殿聖護院宮御末、小田原玉龍坊配下府中門善坊霞下、多摩郡中取締役也。先祖大久保掃部は武家にして江戸之人也。復飾して本山修験となる。元祖宗山は金剛院と號して二代柳覺は持寶院と號し、三世慶岳、四世源良、五世良山、六世英岳、七世宗岳、八世俊海、九世源海、十世良源、十一世慶傳、十二世柳光、十三世柳觀、十四世柳證、十五世有慶、十六世陸通、十七世恵俊 十八世康榮に至る。始め大清大と號し後大聖山と改称せり」(『狭山之栞』)



大日堂の本尊である大日如来(石造)に持寶院の銘が刻まれているとされる。大日堂墓地には大久保家の墓地がある。

大日堂大日如来

・寶珠山西樂庵地藏堂(狭山村之内宅部＝多摩湖の湖底)

「往時宅部山三光院の末寺にして西樂寺地藏院と號し本尊延命地藏尊は長五尺 脇侍不動尊は長四尺なりしが故ありて幡ヶ谷村莊嚴寺へ移し廃寺となりし跡に一字を建て西樂庵地藏堂と呼ぶ」(『狭山之栞』)

・道金寺(狭山村之内宅部＝多摩湖の湖底)

「吾庵稲荷は字吾庵ヶ谷戸にあり。昔道金寺の鎮守なりといひ博ふ。道金寺の本尊は吾庵の薬師如来なり。日暮里村へ移し廃寺となる。今に此地を道金寺場という。・・・」(『狭山之栞』)

吾庵稲荷の事を述べたものだが、道金寺があったことが読みとれる。貯水池の湖底となった宅部川の近くにあった。

・常覺院(多摩湖の湖底)

「御料神社 字内堀にあり。鎌倉権五郎景政の霊を祭る。……別当常覺院は復飾して内堀宅美を改め神官となる」(『狭山之栞』)

「愛宕神社 旧別当は鎌倉権五郎景政の臣寺嶋小重郎、靈光山東光院と称し聖護院宮御末となり、その倅東光坊の後常覺院長慶之を嗣ぎ、以後世世その職にあり」(『狭山之栞』)

・高木山妙樂寺 高木 2-106

妙樂寺は、明樂寺と書かれた資料もある。古くは尉殿神社(現在の高木神社)の別当寺であり、円乗院の隠居寺ともいわれた。高木神社に隣接し、現社務所がその跡という。明治の神仏分離令の際、廃寺となった。

「新義真言宗上石神井村亀項山三寶寺の末派にして、本尊不動明王長一尺許の立像並に両童子及び地藏菩薩の立像長一尺二寸は方今地藏堂へ合併す。境内壹反貳畝歩の除地は奉還す」(『狭山之栞』)

「尉殿権現社……別当妙楽寺社地の東にあり、高木山と號す、新義真言宗、豊島郡石神井村三寶寺の末、早創の始を博へず、本堂四一四方南向、本尊不動木の立像一尺二寸を置り」（『新編武蔵風土記稿』）

「尉殿神社 別当妙寺なりしが維新以来遠山左衛門尉家 鐵右衛門復飾の上宮島岩保と改称して神官となる」（『狭山之葉』）

・奈良橋村 覺寶院

「覺寶院 これも修驗して、八幡山と號す、同じ支配なり」（『新編武蔵風土記稿』）

「八幡宮・・・別当本山修驗八幡山覺寶院は聖護院旧宮末小田原玉龍坊配下府中門善坊霞下也。境内六反歩及び山王分六反歩除地なりしが維新の際奉還す。元祖諸寶院より十一世承盛の世押本肇と改名復飾して神官となる」（『狭山之葉』）

「愛宕社村内の修驗覺寶院の持」（『新編武蔵風土記稿』）

・奈良橋村 大徳院

「大徳院 除地、二段、修驗なり、府中門善坊の末、愛宕山と称す、寛永十六年聖護院宮より、金欄の袈裟を賜りしと、その故を伝えざれど、この頃よりの修驗なるべし」（『新編武蔵風土記稿』）

「本山修驗愛宕山大徳院は元祖東覚院より廿三世教順の代・金功に依り準年行事となる。維新後復飾して押本愛丸と改称神官となり愛宕神社を守護せる故愛宕山とは號せしなり」（『狭山之葉』）

（東大和市市史資料編8 信仰のすがたと造形 p56～60）



鳥居と覆屋で庚申塔が祀られている様子（清水）

「新編武蔵風土記稿」文政11（1828）年成立。昌平覺地理局總裁林述斎編、全265巻。多摩郡は原胤敦の編纂により文政5年（1822）完成。

「狭山之葉」杉本林志著 明治9（1876）年出版。